



# この一冊

Vol. 97



会員 今戸 智恵 (56期) ●Tomoe Imado

私は、医療訴訟（医療過誤訴訟）の専門家ではないが、縁あって、現在、ある大学病院で仕事をしている。病院の臨床現場に極めて近いところにいると、医師たちからため息にも似た生の声を聞く機会がある。医療機関の規模や専門とする診療科によって抱える問題は異なり、医療行為に関する考え方もそれぞれである。しかし、医療に対する思い、患者の命に対する思いは、多くの医師に共通すると感じている。

「ノーフォールト」——著者である岡井氏は、大学病院の現役の産婦人科医である。この物語は、不幸にも自らが執刀した患者に医療事故が起きてしまった医師の苦悩を極めてリアルに描いている。このタイトルは、「No-Fault Compensation」（無過失補償制度）からつけられたものだという。岡井氏は、産婦人科医療における無過失補償制度の導入の創設にかかわってきた1人であり、産婦人科医の不足を招く産科医療の問題点を少しでも多くの人に知ってもらいたいとする、岡井氏の思いが込められた題名である。

物語のあらすじは、こうである。主人公の女性産婦人科医の柘奈智は、過酷ともいべき臨床現場で産婦人科医と

## 『ノーフォールト』 (上)(下)



岡井 崇 著  
早川書房  
各648円(税込)

して、日々患者とこれから産まれてくる小さな命に向き合っている。ある夜の当直、徳本美和子という妊婦の容態が急激に悪化する。赤ちゃんの命を救うためには一刻の猶予も許されないと判断し、奈智は、上級医師が不在の中、緊急手術に踏み切る。術中に多量の出血があったものの、母子ともに、何とかその命を助けることができた。しかし、美和子は、最初の手術から1週間のうち原因不明の二度の大量出血に見舞われ、奈智ら医師たちの懸命の努力にもかかわらず、亡くなってしまった。救おうとして懸命に向き合っても救えなかった命、目の当たりにした患者の死に、過失があるとなかろうと、医師として自責の念が生じないわけがない。深く落ち込む奈智に追い打ちをかけるよう

に、遺族から医療訴訟を起こされる。

物語の後半は、医療訴訟における医療者側と遺族側の攻防を主軸として、医療事故にかかわる様々な人々の思いがそれぞれの立場から描かれている。遺族側の代理人である弁護士は、過失の認定を取りたいがために、証人尋問の際に執拗に奈智を攻撃する。まるで犯罪者のように扱われた奈智は、心に深い傷を受け、大学病院を去ろうとする。

産婦人科医の不足を招いた原因が医療訴訟のみにあるとは思わないし、この本における弁護士の描写は、さすがに行き過ぎの感を抱かざるを得ないが、医療訴訟の当事者となった医療者にとっては、遺族側代理人の弁護士がこのように映ることがあるのかもしれない。確かに、遺族側弁護士としては、医療事故の真実を明らかにし、より多くの損害賠償金を勝ち取ることが最大の使命であり、そのために最善を尽くすことは必要である。しかし、その際に、相手方となる医療者側に対して思いを向けることも、社会正義を実現することをも使命とする弁護士として必要なことではないかと考えさせられた1冊であった。

■